

2021. 5. 2 (日) マタイ24:32~35

24:32 いちじくの木から教訓を学びなさい。枝が柔らかくなって葉が出て来ると、夏が近いことが分かります。

24:33 同じように、これらのことをすべて見たら、あなたがたは人の子が戸口まで近づいていることを知りなさい。

24:34 まことに、あなたがたに言います。これらのことがすべて起こるまでは、この時代が過ぎ去ることは決してありません。

24:35 天地は消え去ります。しかし、わたしのことばは決して消え去ることがありません。

<説教>

イエスは弟子たちの質問にお答えになって、ご自分の二度目の到来（再臨）とそれによって世を終わらせる時のしるしについてお教えになりました。

ご自分の弟子たちが予め知っておくべき必要なことを〈前もって話し〉(25)してくださいました。

それで、イエスはご自分のことばは完全に信じるべき確実なものであることを弟子たちに強調なさいます。

イエスが弟子たちにお語りになったこと、お教えになったこと、イエスのことばを弟子たちは確かなこととして信頼しなければなりません。

ご自分が再びこの世に来られて世を終わらせる時が近づいていることは、わたしのことばを聞いた〈あなたがた〉(33,34)弟子たちこそ正しく〈知りなさい〉(33)とイエスは言われました。

そのことをイエスは〈いちじくの木〉をたとえ（「教訓」）にしてお語りになりました。

その日また前日に見たあのいちじくの木—葉があるだけでほかには何もなく、イエスのことばによって枯れた(21:18,19)—が思い出されたのかもしれませんが。

〈枝が柔らかくなって葉が出て来ると、夏が近いこと〉を弟子たち（だけでなく誰もが）は〈分か〉ります（「分かる」と「知る」(33)は同じ語句）。

それと〈同じように〉、〈これらのことをすべて見たら、あなたがたは人の子が戸口まで近づいていることを知りなさい〉とイエスは言われました。

ここで言われている〈夏〉は（暑い）季節ですが、同時にいちじくの実の「収穫、刈り入れ」の時期ということです。

直前で言われた〈人の子は…人の子が選んだ者たちを集めます〉(31)ということが思い起こされます。

〈選ばれた者たち〉(22)、〈人の子が選んだ者たち〉(31)、イエスの弟子たちは、世が終わる時代には、イエスの名のためのまた反キリストとの戦いのゆえの〈苦しみ〉(9)、〈大きな苦難〉(21)、〈苦難の日々〉(29)を覚悟しなければなりません。

イエスがお教えになった、〈世が終わる時〉、そしてその〈しるし〉のほぼすべてが決して明るく喜ばしいもののように—肉の感覚では—思えないものでした。

しかし彼らはそんな中で、神の恵みによって〈最後まで耐え忍び〉(13)、福音を〈全世界に宣べ伝え〉〈すべての民族に証し〉するのです。

そんな〈選ばれた者たちのために〉〈大きな苦難〉の〈日数が少なくされ〉るのでした。

そういう者たちにとっては、〈偉大な力と栄光とともに来る〉(30)イエスを見、イエスがお遣わしになる御使いたちによってイエスのみもとに集められる―収穫される―ことは夏の甘い〈いちじく〉の収穫以上の、いやそれは比べものにならないほどの喜びです。

それ故、イエスの名のためのまた反キリストとの戦いのゆえの〈苦しみ〉、〈大きな苦難〉、〈苦難の日々〉を思いわずらって、またはその直中(ただなか)にあつて信仰を捨てるな、希望を失うな、悪魔に反キリストに惑わされるな、むしろ〈人の子が戸口まで近づいていることを知りなさい〉とイエスは言われます。

〈人の子が戸口まで近づいている〉、すなわち主イエスが再び来たりともう時が近いというみことばからは黙示録 3:20 も思い起こされます。

「見よ、わたしは戸の外に立ってたたいている。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入って彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」(黙示録 3:20)

これはラオデキヤの教会に悔い改めをお命じになるイエスのみことばですが、〈夏が近い〉、〈人の子が戸口まで近づいている〉ことを知る者も〈苦難の日々〉の中で、やはり「日々」信仰と希望をもって悔い改め、イエスと〈ともに食事をする〉、すなわちイエスとの親しい交わりうちを歩むのです。

なお、すぐ後の「最後の晩餐」のときに「わたしの父の御国であなたがたと新しく飲むその日」(26:29)ともイエスは言われます。

私たちは今の、そして今後更に増し加わるイエスの名のためのまた反キリストとの戦いのゆえの〈苦しみ〉、〈大きな苦難〉、〈苦難の日々〉の中で、時につまずき、〈日々〉何らかの罪を犯している罪人でもあります。

それでも、いや、そうだからこそ、いっそうイエスとイエスのみことばを信じ、依り頼み、イエスがもたらしてくださる「その日」を待ち望みます。

私たちの真実な救い主、イエスとイエスのみことばに対する信仰と希望と愛を、そして悔い改めをもって主の聖晩餐にも与り、〈主が来られるまで主の死を告げ知らせる〉(I コリント 11:26)のです。

そういうわけで、〈終わりの時〉に必ず起こるところの、イエスの名のためのまた反キリストとの戦いのゆえの〈苦しみ〉、〈大きな苦難〉、〈苦難の日々〉を、〈夏が近い〉、〈人の子が戸口まで近づいている〉という希望、喜びとして受けるのに必要なのがイエスのみことばに全く信頼することです。

〈わたしのことばは決して消え去ることがありません〉(35)とイエスは宣言なさいました。

人の目にはまるで不動不滅のように見えても、〈天地〉は〈消え去ります〉。

創世記 1 章に記されているように、〈天地〉万物は神のみことばによって無から造られました。

また、〈天と地にあるすべてのものは、…御子にあつて造られ…。万物は御子によって造られ、御子のために造られました。〉(コロサイ 1:16)

ですから神のみことばによって、御子(イエス・キリスト)によって〈天地は消え去ります〉。

そして〈天地〉とともにある〈この時代〉(34)もやはり〈過ぎ去る〉－〈消え去る〉と同じ語－のです。

ただしそれはイエスが前もってお話しになった〈これらのことがすべて起こ〉った後なのです(34)。

しかし〈わたしのことばは決して消え去ることがありません〉と言われるのですから、必ず〈これらのことがすべて起こ〉り、必ず〈この時代が過ぎ去る〉のです。

そしてそのことも〈この時代〉の要請や力によって起きるのではなく、神のみことば、イエス(のみことば)によってなされるのです。

同時に〈この時代〉の中でイエスとイエスのみことばを信じ従うイエスの弟子たち、私たちが必ず受けるイエスの名のためのまた反キリストとの戦いのゆえの〈苦しみ〉、〈大きな苦難〉、〈苦難の日々〉もまた必ず〈消え去ります〉－イエスが消し去ってくださるのです－。

永遠に〈決して消え去ること〉がないのは主イエス・キリストのみことばだけです。

私たちは主が〈戸口まで近づいている〉ことを主のみことばによって知り、主が再び来られる時、最後までこの主のみことばだけに信頼し、みことばに堅く立って動かず、みことばによって励まされ、また戒められ、みことばを宣べ伝え、証して行くのです。